

## “弱兵”からの遺言

松本侑壬子・ジャーナリスト

新藤兼人監督は、95歳の現在も次回作を準備中の、日本映画界の巨匠にして最高齢の現役監督である。人間の性や本能や母性愛から鋭い社会派作品まで、幅広いテーマの作品を作ってきたが、今回初めて自身の戦争体験を映画化したのが本作（原作・脚本・証言）である。32歳で召集令状により1年半軍隊生活を送ったその体験が、自身の語りによるドキュメンタリー部分と俳優を使ったドラマ部分とで構成してある。

敗戦の前年1944年春、当時松竹大船脚本部のシナリオライターだった新藤は、広島県の呉海兵団に入隊、そこで1年間“シャバの生活人”新兵として受けた訓練の内容とは一。

まず待っていたのは「お前らはクズだ、クズを一人前の兵隊にしてやる」という18歳の兵長からのビンタの嵐だった。なんで殴るのか、殴られる側も殴る側もわかってないままに次々に殴られる。それが皮切り。きっちりと組まれたプログラムの中身には、罰ゲームさながらのあらゆるいじめ、体罰、懲戒、中には上官のサディスティックな遊びのような蛮行が伴っている。祖国を守る、愛国心、天皇陛下万歳といった美辞麗句の陰で、既に戦闘行為以前に軍隊内で吹き荒れる理不尽な暴力の嵐。

反抗は一切許されず、倒れても倒れても起き上がり、直立不動で次の暴力を待つ。起き上がれない者は、バケツの汚水を頭から浴びせられる。規律に反する者には目を覆いたくなる無残な懲罰が待っている。

こうしてみっちり殴られ、精神棒（尻を叩く棍棒）

をくらい、あらゆる体罰を受けるうちに、職業軍人から見れば歯がゆいほど弱い召集による一般市民兵たちも「日本の兵隊」に仕立てあげられていく。命令されれば、弱兵なりに命懸けでどこへでも行き、何でもするようになるのだ。軍隊というものの内包する暴力と狂気、さらには愚かさにはユーモアすら見いだすのは、新藤さんの目だ。あまりにばかばかしくて、笑うしかない。でもその行為の当事者でもあり続けねばならない不条理。「軍隊は決して崇高なものではない。決してかっこよくなかない」一弱兵なればこそ、そして今だからこそ、95歳の証言の説得力である。

そんな地獄のような日々にも、楽しみがある。一泊の入湯外出だ。仲間の一人は、妻の待つ下宿の部屋にこもり切り濃密な時を貪る。面会に来た妻子の前で、上官に殴り倒される兵士もいる。愛する夫、父が惨めな姿で地面に転がるのを目の当たりにする妻子の凍りついた目。殴った上官にも家族はいるのだろうか。軍隊生活を支えるのは、家族への思いである。

新藤さんの忘れられない思い出の一つは、若い兵士が出撃前に見せてくれた妻からの葉書。「今日はお祭りですが、あなたがいらっしゃらないでは、なんの風情もありません」とあった。その愛の言葉を胸に飛び立った兵士は、二度と戻っては来なかったという。

戦争とは何か、軍隊とはどんなところか、体験者としての静かな問いかけと強い怒りが画面から伝わってくる。新藤さんの愛弟子、山本保博さんの映画監督第1作である。



日本映画（95分）／山本保博監督

おか  
『 陸に上った軍艦 』

7/28より渋谷ユーススペースにてロードショー、以降全国順次公開

